

に わ せい どう

丹羽正道



丹羽正道 (1863 ~ 1928)

出典：シンポジウム「中部の電力のあゆみ」第4回講演報告資料集

電灯線を張りめぐらした男 — 中部地方の電力の夜明け —

丹羽正道は尾張藩の儒学者丹羽氏任の長子として、名古屋の新町二丁目（名古屋市中区広小路御園）に生まれた。愛知県中学校を出て上京し、1881（明治14）年、工部大学校に進んだ。工部大学校の修業年限は6年で、2年毎に、普通科で一般教養を、専門科で専門科目を、実地科で実務を習得。正道は1885年に実地科に進み、米国のエジソン電気会社からの派遣技師の監督の下で1886年内閣官報局印刷所と大阪紡績三軒家工場の電灯工事に参加し、技術の実務を身に付ける訓練を受けた。

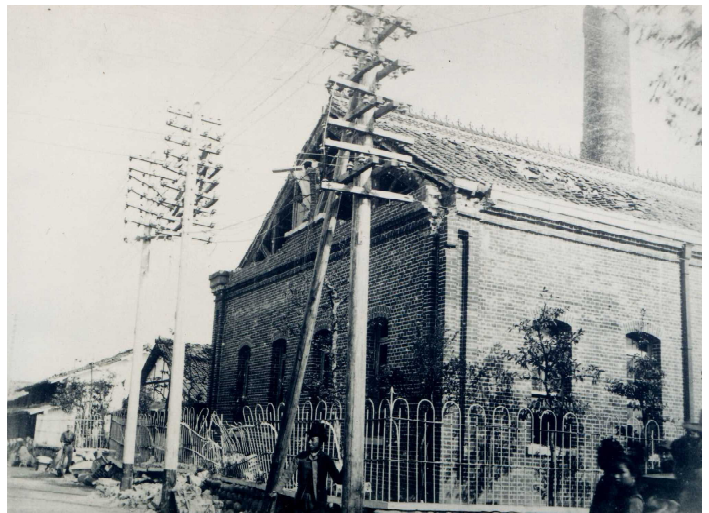
■三重県・名古屋の電気点灯試験

正道は1886（明治19）年11月天長節、三重県庁で移動式発電機により電灯の実演した。同年、11月26日に名古屋区役所の会議室で白熱電球40灯、アーク灯1灯の電気点灯の実演を叔父丹羽精五郎の要請で行った。まだ、名古屋の政財界の人は電灯なるものをまだまだ見たことがなかった。電灯の灯を見て「灯光爛々四を射て人目を驚かし」と称された。これを機に電灯事業への気運が一気に高まった。

当時、愛知県では土族救済の事業をどのするかで沸騰していた。電灯事業が有望であると主張したのは、愛知県衛生課長の丹羽精五郎であった。

■名古屋電灯の技師長として

正道は1887（明治20）年7月、帝国大学工科大学（現 東京大学工学部電気工学科）を首席で卒業し、同年9月に設立された名古屋電灯に技師長として入社した。1887年10月から翌年4月まで、丹羽正道と叔父精五郎は、電気事業の調査と電気機器の買い付けに米国、欧州に渡った。米国では発明王エジソンを訪ね、指導を受けた。エジソン研究所では歓迎され、発明されたばかりの蓄音機に二人の声を吹き込んで聞かせてくれたという。そのエジソンの紹介でドイツのAEG社から発電機（エジソン型10号25kW 4基）を購入し、1889年3月、火力発電所を完成、同年12月に名古屋電灯が開業した。



名古屋電灯本社（1891年、濃尾大地震後）写真：愛知県図書館所蔵電柱腕木の十一印から直流送電であることが分かる。

■地方の電気事業への貢献

丹羽正道は、電気技術者として各地の電灯会社に出かけ、岐阜電灯（1894年5月）、豊橋電灯（1896年9月）、四日市電灯（1897年9月）など電気設備の設計に携わった。また仙台電灯（1894年2月）の創設にも協力している。

正道は、1899年7月、名古屋電灯を辞して、大阪に丹羽工務店を開設した。大阪市の顧問に就任し、大阪市電気鉄道施設の主任技術者を委嘱され、市電工事に携わった。1916年に電車のカーブ運転の技術であるダイヤゴナル・ラジアル車台を発明し、鉄道技術にも貢献した。

晩年は名古屋に戻り、電力の発展に尽くした。1928（昭和3）年1月66歳で逝去した。墓地は名古屋市の八事霊園にある。



1907（明治40）年頃の名古屋市広小路通
この頃にはすべて交流送電に切り替わっている。

出典：中日新聞社『写真集 愛知百年』

（市野清志）